

八月九日、新京から疎開列車が運転されることになり、駅員全員朝七時から部署につき、疎開者の誘導乗車に一日中汗だくで動きまわり、食事をとる暇もないそがしきだった。初めは客車だけ、つぎは有蓋貨車、そして無蓋貨車となって無蓋車の方は気の毒だった。

夜の八時過ぎまで全員よく働いてくれた。体はくたくただった。こんなこともあった。終戦後三日目にソ連軍が進駐してくるといので、駅長と助役に貸与されていた二丁の拳銃を、油を注いで石油の空缶に収納、駅舎の南の大きな二本の榆の木の間を掘って拳銃を入れた空缶を埋めた。

昭和二十年十月、新京支社で辞令を受け、三か月半ぶりに家族のもとに帰ってきた。

昭和二十二年八月二十三日の引揚までの苦労はなみみていてはなかった。

コロ島からの引揚げ船では、庶務要員を仰せつかり、引揚げまでの治安状況などについて書かされた。

見捨てられた在留邦人

埼玉県 吉田 アサ子

昭和十八年十月、共立女子専門学校を卒業した。

昭和十九年三月、父の世話で、奉天市秋町の官舎に、弟、姉と子（四歳）と、私の四人で渡満した。そして四月より私は奉天市立第二女子中学校教諭として、不自由なき平穩な生活に入った。

昭和二十年八月、ソ連軍の参戦から奉天市の中国人市民のせん動の心配が感じられ、日本人に対する態度も変わったので、一時的な避難のため、準備をしていた、八月十五日、終戦の詔勅が放送され、たいへんなことになったんだと不安と心配がふくらみ、父の帰宅の遅れに心配がつのり、ただ、おろおろするばかりであった。父は夜遅く、大きな荷物を持って帰宅し、食事も忘れ、状況の不利を説明し、今後の処置について、女、子ども二人は、男装に近い服装に変え、髪は短くすること、帰国

は相当先になるうから、食糧の確保、官舎内の邦人と結束した行動をとるようになる等、注意指示した。

数日中に、役所(軍)より相当量の食糧が届き、当座の心配はなくなった。その後は、避難できる用意、保存食糧、貴重品等を地下室に隠すなど、忙殺されたが、九月に入り、中国人、ソ連兵等が日本人街に入り、治安が悪化するようになってきた。

予想されたこととはいえ、ただただ、恐怖の一言であつた。さいわいにして、官舎は襲われたが、その被害はわずかなものです。婦女子は地下室に隠れたので、その難はまぬがれた。十一月頃からは、八路軍とソ連軍との交代により、街の治安は保たれるようになった。話によると、相当数の日系住民の犠牲者があつたことを聞き、恐怖でいっぱいであつた。その後、八路軍と国府軍の内戦があり、国府軍の統治となつたが、日本人居留民会へ日本婦人を要求されたので、また後難の狼として、用心だけは注意しあつて、外出等はほとんど男たちの集団行動のみで用事をたして貰つた。

二十年六月始め、老人、女子どもを優先に、奉天地区

第一陣の中に入れられ、鉄西収容所に集結し、貨車で、錦西経由、コロ島港に着いた。その間、停車ごとに国府軍の輸送指揮所にて止められて、金品を要求され、なけなしの金を与えてその難を逃れ、五日目に目的地に到達した。いちおう、収容所に入れられ、二日目より、出国の手続き、きびしい検問、目ぼしいもの、限定以上の金銭等は取り上げられ、ほとんどの人が裸同然になり、五日目にやっと乗船できた。

撃たれた友二人は

東京都 高野 毅

ふるさと、満州奉天で小学校へ通学したころ、馬賊が新市街に出没し、休校となつた記憶があるが、通行人の誘導にあたる警察官のりりしい乗馬姿がなつかしい。

昭和六年四月から奉天郵便局電信課に二年ほど奉職し、満州事変の功労で賜金をいただいた。この郵便局の電話部門が電々公社へ移行されたとき満鉄へ入社し、昭